神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Notes on A Raisin in the Sun by Lorraine Hansberry

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 1968-01-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤松, 光雄, Akamatsu, M
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1992

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ロレイン・ハンスベリーの「ひなたの干ぶどう」覚え書

赤　松　光　雄

Ⅰ　作者の経歴と作品の梗概
Ⅱ　'Dream deferred' をめぐって
Ⅲ　アメリカ文学における黒人像と作者の創作態度
Ⅳ　登場人物の identityと，作者の identity

Ⅰ

アメリカのニグロ女流作家 Lorraine Hansberry は，1930年シカゴに生まれた。黒人としては非常に恵まれた家庭で，父は連邦執行官をつとめたこともある富裕な実業家であった。Englewood High School に通っていた14才のころ，観劇に連れて行かれたのがきっかけになり，演劇に興味をひかれはじめた。The University of Wisconsin, シカゴの Roosevelt College を卒業後，1953年ニューヨークへ赴き，歌謡作者であり，楽譜出版業者の夫，Bob Nemiroff とグリニッジ・ビレッジに住みつき，The New School for Social Research の講義に出たりした。

1958年，生まれ育ったシカゴの黒人地区サウスサイドを舞台にした3幕5場の『ひなたの干ぶどう』(A Raisin in the Sun) を書き，ニグロ文学の戯曲面での代表作として注目を浴びた。（このことは「外大論叢」第16巻6号の「最近のアメリカ黒人文学」のなかで，ふれておいた）批評界からすこぶる好評をもって迎えられ，1958—59年演劇シーズンの最良作に選ばれて，「ニューヨーク演劇批評家サークル賞」を受けた。（参考までに興行面での

模様を若干のべると，1959年3月，ブロードウエイの Ethel Barrymore Theatre の舞台が初演で，主役に名優 Sidney Poitier が扮し，俳優は一人を除きニグロ俳優が演じた。営業的にも大成功で1年7カ月のロング・ランをつづけた。そこでコロンビア映画会社の目にとまり，脚本が30万ドルで買い取られ，映画になった。日本では，劇団「雲」が実験作に取り上げて東京で上演したことがある）

作者は創作活動のみならず，今日のアメリカ黒人の解放運動にも，指導的立場にある文学者の一人として，活潑に取り組んでいた。この面での著作に，'The Movement: Documentary of a Struggle for Equality, (1964) があり，とぼしい筆者の資料のなかの，<邦米活動下院委員会>廃止集会の講演や，ニグロ民族指導者 W.E.B. DuBois 博士の追悼スピーチは，彼女の社会活動の一端を示している。

1963年の始めごろから急に身体の調子がおかしくなりはじめた。診断の結果，ガンだと分った。それでも翌年，彼女が住んでいるグリニッジ・ビレッジを舞台にした3幕7場の戯曲『シドニー・ブラスタインの窓のしるし』 (The Sign in Sidney Brustein's Window) を脱稿した。一進一退の病状は，少しずつ悪化していった。そして1965年1月，第二作のブロードウエイの上演が101回をもって終止符をうったころ，彼女は静かに息を引きとった。

第二次大戦が終わってから現在（1958）までのある時期，シカゴの黒人地区サウスサイドの典型的な安アパートに黒人の Younger 一家が住んでいる。左右に寝室を控え，台所・食堂をかねた居間が舞台だが，日当たりが悪くて薄暗い居間も，家具調度品も永年の使用で痛みきっている。

幕が明くと，金曜日の朝，主人公の妻 Ruth が起きてくる。鈍い光線しか指し込まない唯一の窓を開け，寝室が足らないので居間の中央の寝いすをベッド代りにしている小学生の息子 Travis と，白人のお抱え運転手で30代半ばの夫 Walter Lee（通称 Walter）を起こす。早く起きないと，同階の数家

族共用の廊下のトイレが混んでくる。 Walter が現われる。起きがけに，今日は何曜日かとたずねる。あすは家族の誰もが，幼ない Travis までもが，待ちに待った亡父 Big Walter の生命保険金1万ドルが母の名儀でとどく日だ。 Walter は日ごろ，仲間と酒場を経営する計画に熱中しており，保険金に目をつけ，それを投資しようと躍起になっている。妻にその計画を話すが，金もうけにつかれた夫の話を聞こうともしない。 Walter の不満はつのるばかりだ。20才の妹 Beneatha もやがて起きてくる。医者を志望し医大へ通っている。保険金が入れば，彼女の高額の学資に一部がまわるのは明らかだ。Walter は妹に学校を止めないかといい出し，口論する。Beneatha にとっては，学校を止めるのは，死ぬほど辛いことである。

60過ぎのがっちりした体つきの Walter の母 Lena（通称 Mama）が登場する。 Ruth は Mama に夫は最近まるで人が変ってしまった。あの人には何かがいる，酒場のことをぜひ考慮してやっては，と持ち出すが，敬虔なキリスト教徒の Mama はきっぱりとそれをこばみ，家族全員のため，二人の子の教育費に保険金の一部を割き，残りは永年の夢である独立した家を買いたいという希望を話す。そこへ Beneatha が入って来て，神の名をみだりに口にしたことから， Mama は怒って娘のほほをひっぱたく。一方，妊娠2カ月の Ruth は，過労のため，倒れて義母をおどろかす。

第2場は翌日の朝。これ以上家族がふえれば，ますますこのアパートでは窮屈になる。精神的な疲れも加わって再び倒れる Ruth を， Mama は寝室へ連れて行く。階下のベルが鳴りひびき，いよいよ保険の小切手がとどく，一同は興奮し，手にした小切手のゼロの数をかぞえ，間違いないのでやっとホッとする。外から飛び込んで来た Walter が，酒場の投資を Mama にせまるが， Mama は静かに首をふる。自暴自棄で飲みに行こうとする Walter に， Mama は Ruth がお腹の子をおろそうとしていることを伝え，死んだ父のようにりっぱな父になっておくれと必死に訴える。

第2幕第1場は同日夜。外出から帰って来た Mama が家を買ったことを発表したので，Walter の怒りは爆発する。部屋も幾つかあり，庭もついている理想に近い家は，白人地区にあったのだ。黒人地区の家は白人地区の家の2倍はかかるから，という。Ruth は一抹の不安を感じながらも，大喜びで，この夜だけは遊びからおそく帰った Travis を仕置きする気持にもなれない。

数週間たった金曜日の夜が第2場。Walter の勤務先の白人の主人からの電話で，働いているとばかり信じていた Walter が，3日間も遊びまわっていたことが分り，母と嫁はおどろく。そこで Mama はついに，家の頭金に支払った残りの6千5百ドルを Walter の名儀で銀行に預け，そのうち3千ドルは Beneatha の授業料にし，そのほかは今日以後 Walter が面倒を見るよういい渡す。つまり，家の支払いの残金は家族の働きでおぎない，Walter に酒場の投資を認めたのだ。

第3場は1週間後の土曜日で，引越しの当日である。Ruth と Beneatha が荷造りをしながら，新しい家に入った時の夢を語り合っている。Ruth が Beneatha に，夫が一週間前と比べ，どんなに人が変ったようになったか，また二人の仲がどんなに良くなったかを話している。それを裏づけるように，現われた Walter は，レコードの調べに合わせながら，昔はやった社交ダンスを妻とおどる。だが楽しい空気は見知らぬ白人の登場で破られた。Lindner と自己紹介した男は，引越そうとしている地区の「改善協会」という町内団体の役員で，婉曲に，黒人の家庭に移ってこられては困るから，買われた値段より高く家を買い取りたいと提案する。それを聞いた家族は腹を立て，追い立てるように Lindner を帰してしまう。

一家団らんの真最中に，Walter の友人 Bobo が訪ねて来る。突っ立ったまま涙ぐんでいる。仲間のひとりが Walter の金を持ち逃げしたことを報告に来たのである。Beneatha の学資金をふくめて母から預った金，亡くなった父が血みどろで働いた金，一家の全財産にもひとしい金が，丸ごと消えて

しまった。Walter は床に泣き伏し，絶望が一家をおそう。Mama は無意識に Walter をぶとうとするがとめられる。ひたすら神に力を仰ぐ Mama の姿。

第3幕はそれから1時間ほどたったころ。Walter は寝室でじっと天井を見つめたきり，居間には荷づくりの木わくがしょんぼり置いてある。突然，さわやかに Asagai の声が聞こえてくる。医者をあきらめるという Beneatha に，彼はアフリカの故国の独立の話をし，結婚して海を越え，ナイジェリアで開業しようと誘う。動揺する Beneatha を後に残し，Asagai は出て行く。引越しを止そうと母が Ruth に相談しているところへ帰って来た Walter は，あの白人の前にひざまづき，こじきのまねをして金をふんだくってやるというなり，家族一同が背筋を寒くして見守るまえで，こじきのまねをする。

表に運送屋が荷物を運んで来たという知らせ。と同時に Walter が呼んだ Lindner がいそいそと登場する。満座のなかで，契約書を取り出し，一同を見廻す。父の顔をのぞきこむ Travis の目。Walter はみんなの足さきをみながら，この一家は元奴隷の血筋だったけれども，非常に誇り高い家系で，この Travis が6代目だ。わたしたちは引越しする決心だから，お引取りくださいと宣言する。意外なことばに Lindner はそのまま引き下がってしまう。

崇高な一瞬を打ち消そうとするかのように，荷物の運搬が始まった。運びながら，Beneatha は Asagai の申し出を母に伝える。皆が出て行ったあと，Mama はひとり，名残り惜しげに部屋じゅうを見廻し，窓のところへ歩いて古い植木を持ち，自分を呼ぶ声に答えて退場する。

〔Signet Books で出た The Sign in Sidney Brustine's Window との合冊版（1966）では，最初の上演でカットされた部分が収録されている。それによると，2幕2場の最後に，Walter が10年後の自分のりっぱな実業家の姿を夢想して息子に話すシーンが約2ページ分挿入されているのと，第3幕で，失意の Beneatha を Asagai が勇気づけようとするせりふがやはり2ペ

ージほど入っている〕

II

Hansberry はこの戯曲のテキストの本扉にニグロ桂冠詩人 Langston Hughes の詩『延びた夢のモンタージュ写真』(Montage of a Dream Deferred) を載せている。

What happened to a dream deferred?
Does it dry up
Like a raisin in the Sun?
Or fester like a sore ——
And then run?
Does it stink like rotten meat?
Or crust and sugar over ——
Like a syrup sweet?
Maybe it just sags
Like a heavy load.

Or does it explode?

〔延びた夢はどうなる？　ひなたの干ぶどうみたいに　ひからびる？　それとも　はれものみたいにうんで　流れ出る？　腐った肉みたいに　におう？　それとも　ぬるぬるケーキみたいに　外皮とさとうを塗りたくる？　重い荷みたいに　たわむだけかな　ソレトモ　爆発スル？〕

表題の 'A Raisin in the Sun' がこの詩の引用であることはいうまでもないが，この劇は Hughes の詩を戯曲に仕立て，延び延びになった夢がどうな

るかを追う。Hughes はこの詩で，奴隷解放宣言から今日に至るまで，アメリカの社会において，市民としての黒人の夢が常に担否されて来た事実を暗にうたいこんでいるのであるが，Hansberry は，シカゴのアパートに住む黒人一家に限定し，その一家の人たちの夢，とくに主人公 Walter の夢と母親 Mama の夢が，どんなふうに枯れかかり，うみを出し，悪臭を放ち，たわみ，爆発したか，そのさまざまな相を描いたものといえよう。

1幕1場の亡父のことば「神さまは黒人に夢だけを授けておくのが似つかわしいとお考えのようじゃ」，同じく Mama が亡父を回想する「いい人だった……夢に追いつくことがどうしてもできなかっただけで，それだけのことなんだよ」のせりふは，この劇の基調になっている。Mama の生活は過去何十年間の挫折の連続であった。それは昇華して<家>という夢に結晶している。

> わたしは主人のウォルターのところへ移って来た日のことを，まざまざと思い出します。二週間まえに結婚したばかりで，せいぜいここに住んで一年ぐらいのつもりだったのに。わたしたちは，少しずつ貯金をして，ねえ，おまえ，モーガン公園地区にささやかな家を買うつもりだったのですよ。家を選ぶところまでいったのです。（少しふくみ笑い）だけどさ，本当にね，あの家を買って，きちんと手入れをし，家のうしろにちょっとしたわたしたちの庭園をこしらえようと，これでもいろんな夢を描いていたのにね――（彼女は待ちうけ，ほほえみが消える）結局は何も実現しなかったよ。(1)

Mama の哀調のこもったせりふであるが，キリスト教信者の彼女が子どもたちの生長に託した小市民的なもう一つの願いも，兄はまるでお金の亡者になり，妹は無神論者のようになって幻滅を味わされる。作者は延び延びになってひからびかかった Mama と Walter の夢の間に，めいめいの夢が実現

(1) Lorraine Hansberry. *A Raisin in the Sun* (Signet, 1958) p. 32–33.

の可能性に燃え上がる燃料のように，1万ドルの大金を設定して，投げ込んだ。1万ドルはこの環境の黒人家族の生命保険金の額として，妥当なギリギリの線である。保険金をめぐり，登場人物はさまざまに反応し，夫婦，親子，嫁しうと，兄妹の愛憎を鮮やかに描きながら，夢どうしはからみ合い，反撥し合って，クライマックスへと盛り上がって行く。母が家を買ってしまった時，Walter の夢はいったん消える。だが，Mama が救いの手を差し伸べ，再び明るいきざしが見えるが，たちまち友の裏切り行為にあって，Walter の夢はしぼむ。母の転居の決意もにぶる。Lindner の出現は，夢の様相に新しい意味を加え，Walter は白人から金をふんだくろうとする欲求を捨て，黒人として，人間としての尊厳を宣言する。母親の夢が二重に生きる。

Ⅲ

「アメリカ文化における黒人」と題するシンポジウムが1961年の春のはじめに開かれたが，その席上,『ひなたの干ぶどう』の執筆態度について質問を受けた作者は，次のように答えている。

わたしはあの戯曲で，ある青年 [Walter] を扱いましたが，人種的な素性がどうあっても，あの階級のアメリカ青年ならどうしても，矛盾の対象とならざるをえないと，わたしには思われるような人物なのです……もっとも劇の最後の事件が例外なのと，ニグロ人の登場人物，これは現実ですから，人物の掘り下げの程度も例外なんです。わずか2，3行書きかえてみたり，そういうたぐいのことをすると，もうニグロ人が白人に変えられるなどというのは論外です。そういうのは，ニグロ登場人物の非常に気まぐれで浅薄な取り組み(アプローチ)態度です。

……わたしはあの劇で設定した特定の一家を，真実だと思う現実の状況において，そしてありのまま一家のことを書き出したのです。一カ所だけは，人種的なある重要性を持った問題が自然に介入してくるのは，どうしても避けられませんでした。それはアメリカでのニグロ人の生活が一つの

現実だからです。[2]

ごく当然なことをいっているにすぎないようだけれども，作者の真意を理解するためには，アメリカ文学での黒人の描き方についての理解を必要とするようである。同じシンポジウムの席で，Hansberry は，これまでアメリカ文学で黒人を扱った作品は枚挙にいとまがないほどだが，アメリカ社会の黒人蔑視の社会通念が文学作品の黒人の人物に投影し，それらは甚だしく歪曲された黒人像を生み出した。Uncle Tom, Porgy, Emperor Jones, Joe Christmas, Dilsey など，すべて然りだと断言している。現実の世界で，従来白人と黒人の理解は断絶していたから，白人読者は誤まった先入観をもってステロタイプの映像を期待する。そこで結局何を描いても同じだという Hansberry の次の嘆きに結びついてくる。

> いわゆる一般白人の頭のなかでは，どんなふうにこの人物 [Walter] が描かれていても結局同じことで，やはりエキゾチズムの表現としか映らない……リー [Walter] の人間性はわかるという人はずいぶん多いのですが，なおかつその人たちにもエキゾチックに映るのです。[3]

ニグロ劇作家の Ossie Davis もいっているように，「この劇の大ヒットした理由は観客が主人公一家が普通のアメリカ人の家庭と変らないことを発見した」[4]ことであったが，実は作者の意図に反して，作者の危惧していたように，観客は別の次元で主人公一家を眺めているかも知れないし，その可能性が大きいのである。

アメリカの差別が生んだ特殊状況は，黒人文学にも深い影響を与えないではおかない。しいたげられた黒人たちの文学は，なかには白人たちの歪曲されたステロタイプ的な黒人理解に迎合したり，かかる理解に抵抗なく受け入れられようとする作品も少数ながら生まれたが，必然的に人種差別にたいす

---

(2) 黒人研究の会編訳『アメリカ黒人解放運動』(未来社，1966) 223-224ページ。

(3) 同書，242ページ。

(4) Ossie Davis, *The Significance of Lorraine Hansberry* ("Freedomways", Summer, 1965) p. 399.

る抗議文学の色彩をおびて今日に至っている。被害者意識や犠牲者意識が強すぎたり，教訓や宣伝やイデオロギーが露出して作品としての価値を損なうことも少なくなかった。

この劇を見た John Howard Lawson の評言 '...The monstrous evil of racism shadows the play, but it has no dimensions of horror. It is symbolized in the only white character, who is an ineffectual racist...'[(5)] にも '人種を題材にした問題作' への強い予期が先入観となっているのではないだろうか。アメリカの黒白両作家が作り出した黒人像という二重の桎梏から，まず自らを解放し，そして黒人像を解放すべき課題を，現代のニグロ作家たちはになっている。Hansberry の人種的な立場を回避したかのように受け取ることも可能な上述の発言は，こうしたコンテキストのなかで把握しなければなるまい。もちろん，同じ劇作家の中でも，Loften Mitchel や Ossie Davis のように，より黒人大衆に密着した立場から黒人像の創造に専念することも可能であるし，LeRoi Jones のような方向もありうるのだが。

ステロタイプでない本当の黒人をある特定の状況においてありのままに一家のことを描こうとした作者の試みは成功している。'わたしたちは四六時中，黒人であると叫んでいるわけではない' という作者は，例えば 'Negro' ということばの使用一つにしても作中人物のうちの Beneatha を除き，実に自然である。逆に '例外的な最後の場面' に登場する 'ineffectual racist' の Lindner の描き方も無理がなく，実に 'effectual' に描かれる。おどし文句を並べ立てたり，権威をかさにきたような兇悪な白人ではない，この招かれざる客が，むしろおどおどした，表面折目正しい紳士に描写されているのは，作者の創作態度の反映に他ならない。人種差別はより北部的に，現代的に，階級的に消化され，人物の生活の中に溶け込み，うす暗い部屋の隅にすっかりしみ込んでしまうのである。例えば，ねずみとごきぶりはニグロ・スラム街の脅威だが，同じニグロ作家 John Hudson Jones の短編小説『ハーレム

(5) Arther France, *A Raisin Revisited* ("Freedomways," Summer, 1965) p. 410.

のねずみ』(The Harlem Rat) などを見ると，新しい公団住宅に移りたいがなかなか希望がかなわないニューヨークのハーレムの夫婦を扱い，この戯曲の一家とその点よく似た環境を描きながら，赤んぼうがねずみにほほをかじられるという苛酷な結末で終わらせている。Hansberry はごきぶり退治のシーンを見せ，‘小さい子の皮フはサウスサイドのごきぶりほど強くないからね！’‘……きのうナポレオンみたいに威張ってそこから出て来たよ’，‘ごきぶりをやっつける唯一の方法は，この建物に火をつけることよ’いったせりふのやりとりにこなしている。

作者は，真実の黒人像を描くことに成功している。彫りの深い，重みのある人物は，Walter 一家の，特に Walter 自身と Mama が造形的にすぐれているようである。欲求不満に絶えずいらだち，とげとげしく怒っている Walter。これとは対象的に愛情深い，敬虔なキリスト教徒で，褐色の美しい Mama。新しい世代と古い世代の黒人たちに，この二人物は温かい共感をもって迎えられるに違いない。やせていて，神経質なところは兄そっくりだが，進歩的で，知的なくせに，どこか精神のアンバランスの目立つ‘New Negro’の Beneatha，それに洗濯婦をしたり，白人の台所で働いたりして苦しい家計を助けているので，すぐれて美しい顔にも，世帯やつれの見え出した Ruth も平凡であるが，親しみの持てる女性である。

IV

Walter の夢は無力感から脱出し，自分の力を確認しようとする identity への模索から発しているのだが，この立場は，母親や，妹，それに妻ですら理解できない位置にあるため，Walter の不満はますますつのり，たえずいらだつ。全篇を通じてのユーモラスな作者の筆にもかかわらず，悲劇性をおびてくる。Walter の目は矛盾した社会の偽瞞をきびしく見つめている。母に向って彼はいう。

あなたはいつも人生をありのままに見るようにおれにいっている……考えたんだ……あるがままの人生をね。だれがもうけ，だれが損するかを……ねえママ，それがすっかり分れているのだ。人生はね。まったく。<取る人間>と，<取られるバカ>に分れてるんだ……取る方のやつらは動きまわって，取った上にも取ってやがる。(6)

<取られるバカ>な階級から<取る人間>へ転身したいのだが，黒人であるがゆえ，その望みは絶望的である。

……ママ，ときどき，おれは下町へ行って，ひっそりした涼しそうなレストランの横を通りかかるのだが，そこでは白人の連中が深々といすに坐っていろんな話をしている……数百万ドルに上る取引をやっているのだ……年恰好もおれとそう違わないやつらが目にはいる時もある。(7)

Walter がやっと母から保険金をゆずってもらい，酒場を開くめどに大喜びするのもしばらくのあいだで，仲間の裏切りに出会う。しかし，白人の Lindner 来訪は失った金を取り戻し，なお余るほどの金をふんだくる折角のチャンスなのに， Walter は搾取する側への転身をあきらめてしまった。人種問題の登場するこの作者の‘最後の例外的な事件’は，この作品にとって，また作者自身にとって如何なる意味を持つものであろうか。Lindner の再度の登場で， Walter が人種と人間の尊厳を宣言する場面は，正にこの戯曲の最も感動的な圧巻である。けれども，この‘事件’を導く白人地区の家の購入は，キリスト教信者で，たえず白人とのトラブルを避けてきた Mama の人物を考えると，他の条件を考慮に入れても，どうも腑に落ちない。作者は，そのような不合理を冒しても，‘例外的な事件’を挿入したかったのであ

(6) Lorraine Hansberry. *A Raisin in the Sun* (Signet, 1958), p. 117.
(7) *Ibid.*, p. 61.

ろうか。‘事件’がなければ，この劇は盛り上りの弱いものになる。それは数々の事件を引き締めるかなめであり，結果的には，作者の意図如何にかかわらず，何よりも力強い人種劇と云わざるを得ない結果に終わっている。実は作者は差別を許容するアメリカ社会そのものの不合理性を批判するためには，‘白人地区の家の購入’というプロットの面での無理をあえて冒したのであろう。 Walter の宣言は，それまでの Walter の人間性を無視して金銭にのみ価値を認める生き方への批判でもあるが，むしろそのような人物を生んだアメリカ社会へのきびしい批判となる。Walter が Lindner を呼び出して金を取ろうとしてその名刺を探していると，妹の Beneatha がその姿へ浴せかける。

そうよ——新世界がついに生み出した生き物を見てごらん！……あれあそこに——新興階級の象徴が歩いているわ！　企業家ネ！　資本主義の巨人だわ！……ミシガン湖にヨットを浮かべる夢を見ているの，兄さん？……あの最後の審判の日に会議の席に坐り，アメリカのズラリ居並ぶ禿げ頭の実力者に取り囲まれている自分の姿を見ているの……見たわよ——愚かしさが世界で決定的勝利をおさめるのを見とどけたわ！(8)

憎々しげに，激越な調子で作る Beneatha のことばは，まるで，皮肉屋で情熱家の幾らか気取った知性派 Hansberry 自身の口からじかにこぼれているような感じがする。

主人公 Walter の妹 Beneatha は，今のアメリカに呼吸をしてれば，公民権運動に身を挺しているような大学生であるが，作者は彼女に加うるに，George と Asagai という二人の大学生たちを登場させ，Walter の最後の翻身を意義づけるとともに，今日のアメリカ黒人の位置と，その今後の進むべき方向を暗示させている。劇の構成の上では， Walter の翻身を必然の動き

(8) *Ibid.*, p. 113–114.

として支える土台となり，Beneatha の周辺に二人を出没させることによって，巧みに華やかな色どりを投げかけ，Walter からにじみ出る悲壮感の印象をやわらげる効果を与える。ニグロ金満家の息子 George は‘同化’の方向を示す象徴のように，骨を抜かれたアメリカ黒人である。‘同化’の意味について，Beneatha と議論しているところはこうである。

George——それは，人を「アンクル・トム」と呼ぶ女子学生用語なんだよ……

Beneatha——それは自己の文化を捨てて，完全に支配的な文化，この場合には，抑圧的な文化に自己を没入して何とも思わないことをいうのよ！

George——これは，これは！　さあ始まったよ！　アフリカの過去の講演が！　テーマは『わが偉大なる西アフリカの伝統について』というのだ！　もうすぐ，偉大なアシャンテイ帝国や，偉大なソンガイ文明や，偉大なベニンの彫刻や——それからバンツー語の詩——など，長々と聞かされて，遺産ということばで一席が終わりになるのだね！　現実をしっかり見ましょうよ，ね，君の遺産というのは，一群のみすぼらしい黒人霊歌と，草ぶきの小屋でしかないよ！(9)

過去の歴史において辱しめられてきたアフリカをどう受けとめるかという問題は，黒人である Beneatha, George の生き方にかかわってくる。Hansberry は George を軽薄な，愚かしい人物に描いて，結局，Beneatha をアフリカの留学生 Asagai のもとに走らせる。Asagai は母ですら惚れ込むほどの好ましい人物である。Asagai は彼女に向い，髪を醜く手入れするのはどういうわけかとか，君の構顔はハリウッドではなくナイル河の女王の横顔だ，などといったりする。彼女は夜明けの独立国ナイジェリアで開業しようという Asagai の結婚申し込みを暗に承諾する。そのすぐ後で，先に引用した

(9) *Ibid.*, p. 68.

‘新世界が生み出した生き物’云々の Walter への痛罵が聞かれるのである。

Asagai の描き方と，この人物がアフリカについて語る時の叙情にあふれた，憧憬の入りまじった調子に，作者自身のアフリカへの強い傾斜が見られる。しかし人物としては観念的すぎて生きていない。そんなところに作家としての芸術的立場と，黒人としての社会的な責任との相克に悩むアメリカのニグロ作家の苦渋が汲みとれる。

Walter の引越し宣言の転向を支えるもう一つの支柱は，2 幕 1 場で Walter がアフリカの部族の尊長となって踊る幻想の場面である。Beneatha が Asagai からおくられたナイジェリアの郷土の衣裳をまとい，またおくられたナイジェリアのレコードを掛けているところへ，酔った Walter があっけにとられる妻をしりめに，つかれたように踊り，出陣せんとする架空のアフリカの戦士たちに雄弁に演説する。心の奥底ではおれは大した戦士なのだと呼びながら，部屋中の架空の敵を突きまわる。観客はこの光景を例によって，エキゾチズムの表現とか，原始へのノスタルジアと感じるかもしれないけれども，見せ場の意味ばかりではなく，平素は表情に出ない黒人の心の深層をえぐり出して，ドラマチックに表現したものであろう。Asagai のせりふと同様，この尊長のスピーチは，人物と context を割引いても全体の劇のせりふとは違って非常に昂揚したトーンであり，Hansberry その人のノスタルジアが波打っている。作者自身の真の自己への回帰——アフリカ人としての identity の確認であるのだろう。

主人公の潜在意識にある黒人の誇り，アフリカ人の血の誇りは，アメリカ社会の不正な差別への宣戦布告の形で劇は幕を閉じる。しかし白人社会への引越しは，アメリカ社会との‘統合’の方向づけを意味するのであるが，作者は五年後の ‘The Sign in Sidney Brustein's Window’ で，その‘統合’から学んだ意味について解答を与えてくれる。

白人社会への引越しは，いやおうなしに，主人公も不正な圧力との戦いに

駆りたてるであろう。現実の劇の幕は切って落とされたばかりである。彼らが容易に屈服しない意志の力，生命力の持主であることを，作者は随所に暗示している。それは Mama の表情， Walter のアフリカの踊りとスピーチ，最終幕の冒頭のゴスペル・ソング『疲れるものか』(We Never Tired) などに表われている。何れも黒人の民族的遺産である。 Mama は初めて登場するとき，植木を窓外から部屋の中へ入れてやるが，植木を抱えて出て行くところで，劇は終わる。アフリカに根を下ろした植木は，＜夢＞の縦糸に，＜人種＞の横糸を通して完成したタペストリーの模様のように，鮮やかな印象を残し，たとえ日が当たらないでも，ひからびても，朽ちることなくたく，ましく生きようとする生命の力を象徴している。